広島日仏協会報

BULLETIN　No. 216

広 島 日 仏 協 会
SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE

アリアンス・フランセーズ
ALLIANCE FRANÇAISE

広 島 日 仏 学 院
CENTRE CULTUREL FRANCO-JAPONAIS

HIROSHIMA

décembre 2024

竹内泰彦さんの思い出

原野　昇

今から75年前の1949（昭和24）年に創設された広島日仏協会は、広島の2国間交流協会のなかで最も古い協会である。その創設者の一人中村義男氏は広島大学文学部フランス文学の教室主任であった。竹内泰彦さん（さんと呼ばせていただく）はその仏文教室の卒業生である。同教室の卒業生のなかには、竹内さんと同様に、恩師が創設した広島日仏協会を役員（理事、専務理事、副会長、監事）として支えた者が多くいる。大牟田稔、西岡政治、加藤宗登、野口脩、田中隆二、今中亘、阿壽賀三朗、白銀敏枝、玉田健二各氏である。そのなかでも竹内さんは最初から最も長く尽くされた。長いだけでなく、松田耕平、山本和郎、後藤文生、三山秀昭の歴代会長を支えながら、パリ祭、ボジョレの会をはじめとする協会の諸行事に際し事務局が処理しないといけない案件に対し、専務理事や事務局に対し常に的確な助言を与えられた。筆者が専務理事を務めた1992年から2007年までの15年間も、諸々の細かな事柄を全て竹内さんに相談しながら処理した。竹内さんは人の話をじっくり聞き、常に冷静に、穏やかな言葉で説得し、全体をまとめる人であった。

そのような竹内さんの功績に対し、フランス政府は1998年に芸術文化勲章L'Ordre des Arts et des Lettresシュヴァリエ章を贈ってこれに応えたが、当協会にとっても非常に喜ばしいことであった。

エールフランス航空は、1970年1月に、大阪－パリ線の開設を記念して、各界の要人を招待してその就航を祝った。当協会では、松田耕平会長の名代として竹内さんがその記念飛行に参加された。ちょうど筆者は、フランス政府給費留学生として、当時パリ滞在中であったので、パリで竹内さんを迎え、竹内さんがあらかじめアポイントを取っておられたパリの有名な菓子屋さんに同行し、通訳を務めさせていただいたのも懐かしい思い出である。

周知のように、竹内さんは平安堂梅坪の社長として、広島県の菓子業界でも活躍されたが、特に2013年には広島県菓子工業組合理事長として、広島市で開催された第26回全国菓子大博覧会を大成功に導かれたのは特筆に値しよう。　【令和6年7月20日（土）逝去】

（『広島日仏協会報』52号、1970年5月、同143号、1998年12月参照）

広島日仏協会副会長

勲章授与式：ナウム大阪・神戸総領事から叙勲、乾杯の音頭をとられるありし日の松田耕平元会長と竹内氏

フランス文化の薫りに惹かれて

在広島フランス名誉領事　飯田　政之

早いもので今年もあとわずか。この一年、様々なフランスのニュースが伝えられましたが、その一つが映画俳優のアラン・ドロンの死去でした。日本における彼の名前は、映画よりもむしろ1970年代のレナウンの紳士服ブランド「D'URBAN,」のテレビCMで広まったように思います。アラン・ドロンのつぶやく「D'URBAN, c'est l'élégance de l'homme moderne」という一言は、初めて覚えたフランス語でした。素敵な発音だなと思いました。

フランス語といえば、私は大学で仏文を専攻しました。不出来でしたが、4年生の夏、親のすねをかじって東京日仏学院主催の「夏季大学」に参加、ブルゴーニュ地方のディジョンという街に2か月ホームステイしました。当時、読売新聞の入社試験は10月だったので、私はエントリーシートに「滞仏経験あり」と書きました。面接した編集局長は、元パリ特派員で、「いったいどれぐらいいたのか、フランス語で答えよ」とフランス語で質問してきました。「二か月間です（pendant deux mois)」と答えたのですが、これだけだと二の矢、三の矢が飛んでくるととっさに思い、「短い時間でしたが、赤ワインやマスタードがとてもおいしく、毎日が幸せでした(Même si le temps était court, le vin rouge et la moutarde étaient si délicieux que je me sentais heureux chaque jour.)」となんとか仏作文して答えたら、軽く笑いをとり、フランス語のテストは終了。忘れられない一コマです。もし、切り返せなかったら、入社できず、結果的に今、広島テレビにもいなかったかもしれません。

仏文に進んだ理由としては、小林秀雄や大江健三郎のように優れた文学者が仏文出身だったということもありますが、それ以上にフランスの文化に惹かれたことが挙げられます。生まれ育った鹿児島での中学生時代、ラジオでビートルズやカーペンターズ、サイモンとガーファンクルと同じぐらいフレンチポップスも聴いていました。ミッシェル・ポルナレフの「シェリーに口づけ」や「愛の休日」、ヴィッキーの「恋はみずいろ」、フランソワーズ・アルディの「さよならを教えて」。テレビでは越路吹雪や加藤登紀子、あべ静江がジュリエット・グレコやイヴ・モンタン、ピアフの曲を日本語で歌っていました。小説ではサガンの「悲しみよ こんにちは」がベストセラーになり、映画ではゴダールやトリュフォーのヌーヴェルヴァーグがはやりで、ルルーシュの「男と女」、ルイ・マルの「死刑台のエレベーター」、ドヌーヴ主演の「シェルブールの雨傘」など・・・・。フランスの文化が日本で存在感のあった時代でした。

あの頃に比べるとフランスを感じる機会は減っているように思います。米国や中国の政治、経済及びビジネスでのステイタスが欧州に比べて圧倒的に高くなり、それがフランス文化の優位性の低下や、日本への文化流入の停滞に影響しているのではないでしょうか。ただ、今年見たフランス映画「至福のレストラン　三つ星トロワグロ」と「パリの小さなオーケストラ」は秀逸でした。やはりハリウッド映画とは違う文化の薫りを感じます。

一方、フランスでは日本の漫画、アニメ、ゲームなどポップカルチャーファンが多く、柔道も盛ん。和食のレストランが増え、日本酒好きも少なくないそうです。原爆ドームや宮島などを訪れるフランス人観光客の姿も目立ちます。

広島テレビは毎週木曜日の夕方「テレビ派」の番組「あんた～広島で何したん？」の中に「Mon Japon」というコーナーを設け、フランス人のコメンテーター、アラン・マリーさんに、「日本の魅力」を伝えてもらっています。ぜひご覧ください。

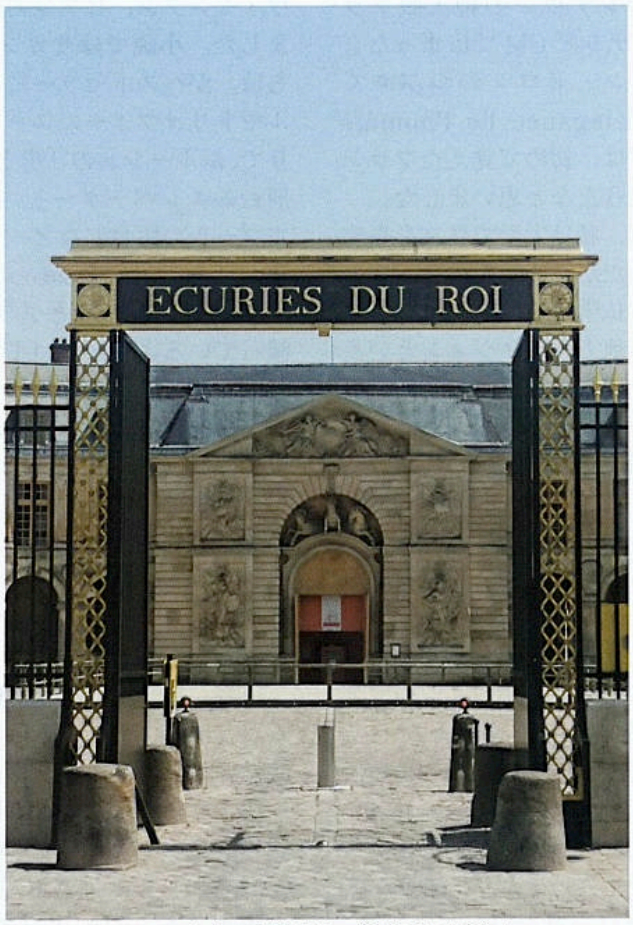
私は、名誉領事に就任（le mardi 8 mars 2022）したのを機にNHKの朝のラジオ講座「まいにちフランス語」を聴くのが日課になりました。皆様と一緒にフランスについての理解を深めていきたいと思います。

（広島テレビ代表取締役社長）

2024パリオリンピック観戦の旅

土﨑　文子

本年７月26日から８月11日、パリオリンピックが開催された。この場をお借りして、パリオリンピック観戦を振り返ってみる。発端は、前回の東京オリンピックでチケットを入手したが、最終的に無観客開催となり、観戦が実現しなかったことだ。趣味で約20年程乗馬を続けており、東京であれば世界レベルの選手と馬を見に行くことが可能であるとチケット入手時は歓喜した。しかし東京オリンピックはほとんどの競技が無観客開催となり自分のオリンピック熱も薄れていった。しかしパリ大会の詳細が発表され、馬術競技がベルサイユ庭園で行われる報に触れ、この何とも粋な会場設定は是非実際に観戦したい、チケットが手に入ったら何としても行くと固く決意し、旅の準備を始めた。



ベルサイユ宮殿向かい側「王の厩舎」

ここで、オリンピック馬術競技について記しておきたい。

以下、日本馬術連盟公式サイトより抜粋引用。

馬術競技は、「馬場馬術」「障害馬術」「総合馬術」の３つの種目がある。

「馬場馬術」は20ｍ×60ｍの長方形のアリーナ内で行われ、馬の演技の正確さや美しさを競うもので、決められた順番通りに運動する規定演技と、音楽に合わせて行う自由演技がある。

（自分はこの競技を２日分観戦した。）

「障害馬術」は、競技アリーナ内に設置された様々な色や形の障害物を決められた順番通りに飛越し、走行する。障害物を落下することなく、また馬が障害を避けたり止まったりせずに、規定の時間内にミスなくゴールすることが要求される。

「総合馬術」は、馬場馬術・クロスカントリー・障害馬術の３つの種目を、同じ人馬のコンビで行うトライアスロンのような競技で、人馬ともに総合的な能力やテクニックが要求される。また、３日間にわたって行われるため、馬のコンディション維持が重要である。

（日本の銅メダル獲得はこの競技である。）

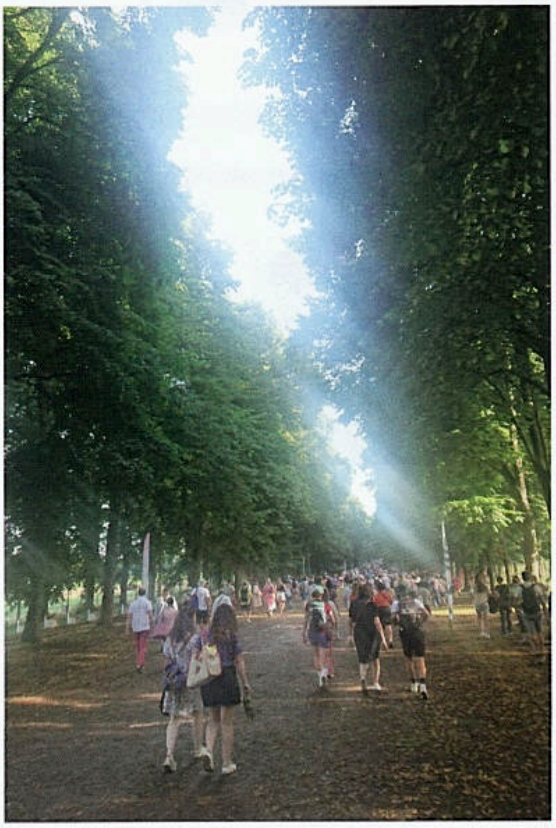
2022年、初回チケット抽選に当選以降、およそ半年単位で希望日申し込み→購入→ｅチケット受領、と段階を経てチケットの準備が整った。ツアーではなく個人旅行を考え、事前にフランス語に接しておこうと、広島日仏協会の初級講座に参加させて頂いた。習得は未だ亀の歩みであるが、現地では「会話」こそできなかったが、駅や街中の表示はそこそこ理解できた。また、一方通行のフレーズであれば通じる場面もあった。しかし「フランス語話せるの？」と思われて続けて早口で

返され、「すみませんやっぱり英語でお願いします」と苦笑いばかりであった。また、「パリ旅行では○○に用心！」といった情報も事前に調べていたが、オリンピック対応の警備とボランティアが至る所に立っており、空港から市内への移動、街歩き、地下鉄やバスの利用、シャルトル大聖堂へ足を伸ばしたり等々、普段以上に安全なうちに行動できたのではないだろうか。1週間の滞在中、昼は30度を超える日々だったが、早朝は20度を下回る日も多かった。涼しいベルサイユの森を競技アリーナまで歩き、20年前から既知の選手の演技を目に焼き付け、会場で頭上から降り注ぐような大歓声を体感できたことは一生の宝になった。思いがけずホテルの朝食ビュッフェのバゲットが「虜」になるほど美味であったことも忘れがたい（毎朝7時に近所のboulangerieから焼き立てが配達されていた！）。次は簡単な会話をしながら、パリ以外の街もめぐってみたい。

最後に、旅行のアドバイス、サポートをしてくださった方達へ心から感謝を申し上げ、筆を置くこととする。

（受講生）

観戦一日目



チケットコントロールを通過後、競技場までの道

観戦二日目

シャルトル大聖堂：写真や映像で知っていたが、実際に目の前に立つと、その大きさや荘厳さに圧倒される

ボジョレ・ヌーヴォの会
（日仏友好の夕べ）

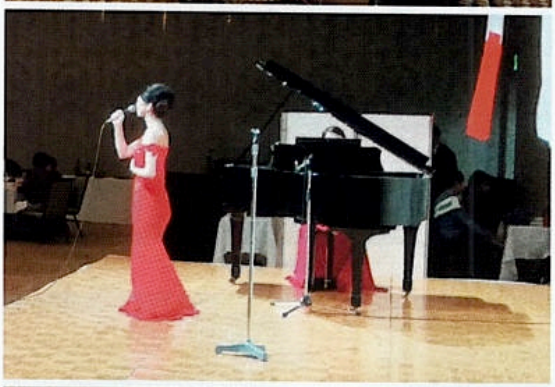
2024年11月26日（火）午後6時30分からリーガロイヤルホテル広島で、秋の恒例行事となっている「ボジョレ・ヌーヴォの会（日仏友好の夕べ）」が開催された。

サンドリン・ムシェ在京都フランス総領事は公務のため欠席でしたが、会場には、この日を楽しみにしていた会員、在広フランス人、会員の友人など110名余が集まり、三山会長の挨拶に続き、飯田在広島フランス名誉総領事による挨拶を兼ねた乾杯の音頭で歓談に入った。

その年に収穫された葡萄で作る新酒の状態を味わい、ワインとの相性の良い料理を堪能している半ばで、クラシックコンサートが始まった。水入恵さんのピアノ演奏で若狭久美子さんの歌声が会場に響きました。『カルメン』よりハバネラ、秋の夜長の『枯葉』等の演奏に聴き入りました。そして会宴の終盤に広島テレビの気象予報士が果実の天候と気温の影響についての小話の後、それに因んだクイズに参加者は挑戦した。*○か×かで回答。（1）ブドウは乾燥したところでよく育つ（答え○）（2）地球温暖化が進むとブドウの糖度が下がる（答え×）*

年明け早々の未曾有の石川県能登半島地方（輪島の東北東30km付近）の地震、2日は羽田空港で日本航空（JAL）機が着陸直後に海上保安庁の航空機と衝突し炎上、379人の乗客、乗員は全員機体から脱出した。このような出来事で始まり、また当協会の重臣の寂しいニュースが入った2024年が暮れようとしている。

原野昇副会長の中締めで一年の締め括りをしていただき、サントリー㈱中国・四国営業本部様からのワイン、そして㈱広島東洋カープ様、広島テレビ放送㈱様からトートバック、巾着の協賛品をいただき、残念ながら雨に降られましたが、参加の皆様の笑顔に癒された年内最後の親睦会が終わった。



写真提供：㈱みづま工房

表紙の写真：クリスマス時期のパリ

発　　行：広島日仏協会
〒730-0037 広島市中区中町6－30
電話・FAX（082）569－5450
E-mail：sfjhiro@crocus.ocn.ne.jp
HP：hiro-sfj.server-shared.com
発行年月日：2024年（令和6年）12月20日
印　刷　所：㈱ニシキプリント